

“日本の家づくりを支える全国の匠たちが京都に集結”

第12回ジャープネット

『日本を元気にしよう 全国決起大会』開催**会員工務店同士が「連携」した経営支援事業「永代ビルダー塾」を9月から開設**

日本最大のホームビルダーネットワーク「ジャープネット」(主宰:株式会社アキュラホーム代表取締役社長 宮沢俊哉、東京都新宿区)は、6月23日ウエスティン都ホテル京都において、「第12回ジャープネット 日本を元気にしよう 全国決起大会」を開催いたしました。同日はジャープネット会員をはじめ、協力企業など総勢200社400名が来場しました。主宰の宮沢から昨年度の実績報告と今年度方針を発表したほか、ゲストの野間光輪子氏(日本ぐらし株式会社 代表取締役)と高田光雄氏(京都大学大学院工学研究科教授)による講演や、「復興から希望へ、永代続く戦略は今ここから始まる」をテーマとしたパネルディスカッションが行われました。

東日本大震災の被害を受けた東北エリアには133社のジャープネット会員があります。なかでも津波で自宅や事務所などを失った花坂ハウス工業(宮城県東松島市)、木村工務店(岩手県釜石市)、津波被害に加えて福島第一原発20キロ圏の玉川工務店(福島県南相馬市)が、被災直後の様子から、事業の再開、復興への思いを語り、来場者全員で共有しました。

震災後に発足された「日本を元気にしようプロジェクト」の一環として、ビルダー連合福島は100戸の応急仮設住宅の建設を行っています。また、被災地3県では住まいに関する様々な困り事に応える「住まいの相談所」を開設し、680万円からとなる地域復興木造住宅の販売を開始しました。

**■ ジャープネット昨年度の実績報告と今年度方針 ジャープネット主宰 宮沢俊哉**

我々が今目指しているのは、永代住み継ぐ住まいを提供して永代家守りを行い、その技を伝承していくことです。そのために我々は永代続く優良ビルダーになる必要があります。昨年度は『長期優良住宅・適正価格・エコ』を重点施策として推進し、ジャープネットの販売実績は7,477棟、発足13年目にして累計87,701棟となりました。会員1社あたりの棟数は平均18棟で昨年(17.8棟)より上向いてはいますが、今後情報をキャッチし新しい技術や素材を組み合わせ進化し続けるためには、20棟以上の規模が必要だと考えています。

今年度は『永代住み継ぐ 住まいづくり まちづくりは地元ビルダーの絆で 永代家守り・地域守り・にっぽん守り』を方針とし、地元ビルダーが「永代続く優良ビルダー」を目指すとともに、震災復興を含め、地域のまちづくりに参画していきたいと考えています。震災以降、7割以上が自然エネルギーへ期待を持つなど生活者の関心は大きく変わりました。こうした市場のニーズに迅速に対応しながら家守り(アフターケア)を強化していく必要があります。そこで重点施策を右記のとおり掲げ、具体的な施策として優良ビルダーやアキュラホームの経営ノウハウを習得する経営支援事業「永代ビルダー塾」を開設いたします。中小工務店の経営論から始まり、マーケティング、商品開発、販売促進、人材育成、コストダウン、施工技術、メンテナンスまで幅広い内容を揃えています。事務局からの一方向ではなく、事務局と会員の双方向、会員同士の「連携」を強化し、チームとして学び合う仕組みをつくります。ジャープネットは志ある会員に対し、「勉強・連携・育成」の場を数多く提供し、共に成長していきたいと考えております。

今年度重点施策

1. 永代住み継ぐ暮らしづくりの追求
2. 永代家守りのジャープネットへ
3. 連携から絆へ～共に育てるネットワークへ～
4. 地元ビルダー主役の次世代のまちづくり展開

<本件について報道関係からのお問い合わせ先>

株式会社 アキュラホーム 広報課 堀越・若林 Email: horikosi@aqura.co.jp

住所: 東京都新宿区西新宿 2-6-1 新宿住友ビル 34F TEL:03-6302-5010 (直通) FAX:03-5909-5560

●写真データは右記よりダウンロードすることができます。 <http://www.aqura.co.jp/news.html>

■ パネルディスカッション

「復興から希望へ、永代続く戦略は今ここから始まる ～京都の伝統と革新に見出す老舗の知恵～」

- [ファシリテーター] **中山紀文(なかやま のりふみ)** 株式会社創樹社 取締役/ハウジングトリビューン編集長
[パ ネ ラー] **野間光輪子(のま みわこ)** 建築家/日本ぐらし株式会社 代表取締役/祇園望月 主宰
花坂雅之(はなさか まさゆき) 株式会社花坂ハウス工業(宮城県東松島市) 専務取締役
弥富尚志(いやどみ なおし) 中小企業診断士/中小企業診断協会東京支部 中央支会 理事
寺本光男(てらもと みつお) 株式会社寺本甚兵衛製瓦 代表取締役
[コメンテーター] **宮沢俊哉(みやざわ としや)** ジャーブネット主宰/株式会社アキュラホーム代表取締役社長

ハウジングトリビューン編集長中山紀文氏がファシリテーターを務め、地元ビルダーが永代続く戦略をテーマに議論が交わされました。

中山 「京都」と「東日本大震災」の2つの視点で、永代企業が存続していくために何が必要かということをご教授いただきたいと思います。京都ではこれまでの歴史の中で様々な危機を乗り越えてきましたが、京都の街づくりや家づくりには時代変化に対応するための特徴があるのでしょうか。

野間 京都は全国で最も老舗出現率が高い町ではありますが、今が一番の危機だと思っています。企業・技が続くにはそれを求める人、その価値を認める人、つまり『お客さま』がいなければ続けられません。ですから本物を見る目を持つ人を育てていかなければいけないと思います。昔はハレとケを使い分け、メリハリのある生活をしており、それが良い目を養う機会となっていたように思います。しかし、現代は徐々にそれが薄れているように感じます。

中山 寺本先生のところは、元禄時代から続いている老舗とお伺いしました。貴社が老舗として最も重要視されている事はありますか？

寺本 当社の歴史は定かではありませんが、元禄期に東本願寺に瓦を納めている記録があるので、そこから推測すると300年以上は続いているのは確かです。ただ十数件あった瓦屋は、今現在は弊社が辛うじて残っているかたちです。続いてきた理由は、瓦町の中では規模が小さく、身の丈の商いで細々と続けてきたことが一つありますが、一番重要なのはお客様と長いお付き合いをさせていただいていることだと思います。東本願寺様とは300年以上経ってもいまだにお付き合いさせていただいています。電話一本で修繕の必要な場所が手に取るように分かりますから、頼むほうも楽ですし、こちらも生きがいになっています。また仕事以外の場面でもお手伝いをする関係であることもいえます。しかし時代の変化と共に、お寺も世代交代、電子入札や相見積りの時代となってきました。値引き交渉や競合も出てきましたが、実は屋根仕事には細部に渡る技術、見えないノウハウがたくさんありますので、ご理解いただければと常々思っています。

弥富 今苦しいのは老舗だけでありません。今はどんな良いものをつくっても売れない、認められない、価格価値で評価されてしまう時代になってきています。しかしそうしたなかでも上手にやっているのは老舗企業です。世界的に見ても日本は長寿企業大国です。現在は野間先生も寺本社長も危機感を持たれていますが、これを乗り越えた企業が「老舗企業」といわれるのだと思います。老舗企業の特徴は大きく挙げて3つあります。1つはこうした時代の変化に柔軟に対応し経営革新を絶えず行っている。それも顧客のニーズを汲み取ったものでなければいけません。2つ目は内部統制が充実している。社内でルールや規制をかけずとも社員一人ひとりが志高く仕事をしている。3つ目は事業承継。後継者対策のできている企業は自己資本比率が多いことが調査の結果わかっています。

中山 少し話は変わりますが、被災された花坂さんに震災の様子を伺いたと思います。

花坂 震災直後の自宅を目の当たりにして、強制的にリセットがかかったようでした。しかし父親の「止まったら終わるからやる」の一言で自分を奮い立たせ、被災地のご入居者の70%ぐらいが津波に流された状態でしたが、ご入居者からの依頼を受け現在対応しています。

中山 東日本復興に関して京都もいろんな危機を乗り越えてきた街ですので、何か生かされるものがあるのではないかと思います。しかし、地域にあわせた対策が大切であると思います。

宮沢 私が花坂ハウス工業さんを訪ねたとき、現場は大変な状態でした。しかし、花坂ハウス工業さんが既にご入居者のことを気遣われ、どんな環境でも前を向いて頑張ろうとしている姿勢に胸を打たれました。本日京都のお話を伺い、「続けていく」というのは作り手だけでなく、住まい手も考えていく必要があるということに改めて感じました。利益も大切ですが、将来を見据えた対応をしなければお客様を不幸にしてしまいます。永代家守りをするためにも永代続く優良ビルダーにならなければならないと強く思いました。

中山 今回の震災で日本人の価値観が変わるのではないかと思います。価値観が変われば、良いものを見る消費者も増えてくるのではないかと思いますし、地域に密着した工務店が大切になってくるのだと思います。

■ ゲスト講演

「ものづくりの原点、伝統と革新 ～逆境に打ち勝った知恵と工夫～」

今年5月に発足した「日本ぐらし館プロジェクト」は、全国の地元ビルダーが元気に活躍していただきたく、日本の持つ良さや地域性をこれからの住まいづくり、人づくりに活かしていくため発足しました。日本文化に基づく自然と日本の木造住宅、自然と共生する居住形態を研究習

得し、今後活かすことを目的に3つのテーマで活動していきます。まず1つ目は木の文化研究会。豊かな居住文化を伝える伝統的な木造住宅に学び、その知識を広く現代の住まいづくりに活かすとともに、新たな日本の住宅のスタンダードを確立するための研究を行います。2つ目にジャープネットの活性化。ジャープネット会員のための国宝・重文建築・京町家などの見学会、研修セミナーを催します。また季刊誌「ジャープネット通信」の発行を予定しており、地域工務店の試みを全国に紹介する機会をつくっていきたく思います。これはジャープネットの営業ツールとして、ブランド価値向上に役立てたく思います。3つ目は日本ぐらし研修会。これまでの日本の良いところ、“本物”を知る母数を増やしていくための活動です。ジャープネット会員や周囲の方を対象として、伝統文化を継承していくために様々なツールを活用したり、京都観光を兼ね学ぶ機会をつくっていきます。

講師：野間光輪子(のま みわこ)

建築家/日本ぐらし株式会社 代表取締役/祇園望月 主宰
京都市木の文化を具現化する推進委員会 副委員長
京山々・木の家づくりの会 相談役/京町家再生研究会 設立者

「環境配慮型住宅のローカルモデル ～平成の京町家の挑戦～」

京町家は、長い歴史の中で、地域の環境に適合しながら、生活文化を育んできました。我々は既存の京町家を保全、再生、活用するとともに、新しい「平成の京町家」をつくっていきたく考えています。一方、近年、地球環

境問題の深刻化から、環境配慮型住宅の開発が強く求められています。しかし、冬を旨としたヨーロッパの環境配慮型住宅技術を短絡的に適用しても、京都の居住文化の破壊につながる恐れがあります。むしろ、京町家の知恵を継承、発展させるなかで、冬の寒さや冷暖房効率の向上を図る方策を探るべきです。とりわけ、季節に応じた生活文化を育んできた京町家の内部空間と外部空間の多様な関係性の継承、発展が重要です。内外をつなぐ空間は、多様な『環境調整空間』としてデザインされていきます。平成の京町家が目指すのは3つ。1つ目は、住みごたえのある住まい。住まい手が住まいに積極的に働きかけて季節感を楽しむ生活文化を育みながら環境負荷を軽減します。2つ目は、住み継げる住まい。木の文化を活かした循環型住宅生産システムを通じて長期耐用住宅を実現します。3つ目は、まちをつくる住まい。いえとまちの関係性を継承発展させ、街区の居住環境を向上させます。平成の京町家を開発、普及するため、事業者、行政、学識経験者等が協働してコンソーシアム(推進協議会)を設立しました。来年は、その活動拠点ともなるモデル住宅展示場がオープンする見込みです。

高田光雄(たかだ みつお)

京都大学大学院工学研究科教授/博士(工学)/一級建築士
京都市住宅審議会会長/京都府建築士会副会長

大会二日目にはバス見学会を実施いたしました。築110年の京町屋「小島邸」や上賀茂の社家「西村家庭園」などを視察し、京都の歴史と文化を学ぶ機会となりました。

■ ジャープネット (JAHBnet) とは

地域ビルダー・工務店 400 社による日本最大のホームビルダーネットワーク。お客様が末永く幸せに暮らせるよう、地域に密着した「家守り」を行い、永大続く工務店を目指している。94年にアキュラホームが開発した独自の住宅建設合理化ノウハウを体系化した「アキュラシステム」は、2,500社以上の全国の工務店に導入され、98年に(財)日本住宅・木材技術センター「木造住宅供給支援システム」に認定。その仕組みをもって工務店組織「アキュラネット」(現・ジャープネット)を設立。組織のスケールメリットを活用し、高品質・低価格の住宅を全国展開。ジャープネットの活動は、経済産業省「次世代省エネ住宅普及ビジネスモデル」の参考にもなった。1998年のジャープネット設立以来、累計販売棟数は80,000棟を超える。2010年「アキュラシステム」は、地域工務店の経営安定と持続的成長に貢献するものと高く評価されグッドデザイン賞を受賞。